

議員研修報告書

報告者 (会派等) 無会派 片野晶子

1. 研修期間	令和6年8月6日(火)
2. 研修場所	北海道余市町役場
3. 研修テーマ	<p>市議会が長年求め続けている、自治体の憲法「議会基本条例」制定に対し、田中市長はR4年度においてようやく制定を約束したが、第9次総合計画の策定期間にあたることから9次総策定後に検討を持ちこしている。</p> <p>北海道余市町は、新町長の策定提案のもと、主幹的部分を住民が担い、住民の手で条例を作り上げた。</p> <p>議員全員で構成する高山市の自治基本条例策定に対する特別委員会の構成員として、策定における手法を参考とすべく学び、それを通じて改めて自治基本条例の本質を研修する。</p>
4. 研修項目	余市町自治基本条例の制定について
5. 概要	<p>※別添付資料参照</p> <p>【質問事項と回答説明】</p> <p>Q1. 自治基本条例策定の際、最も大切だと考えたこと</p> <p>A. まちづくりの主人公は町民であるということ</p> <p>「地方自治の憲法である“自治基本条例”を制定し、町民が主人公であるまちを明文化します。」</p> <p>Q2. 町民の理解度向上における課題と取り組みは</p> <p>A. 町内での普及啓発が消極的で、担当以外の職員の大半は理解が希薄だった。そのなかで、町民の理解度向上に向けた働きかけも質・量ともに不十分だった。</p> <p>Q3. 住民主体で策定に向かった背景、プロセス、課題は</p> <p>A. 地方分権一括法の施行に伴う自治体の自主性強化を背景に、住民主体の条例制定は時流に乗ったものだった。計38回の準備会、策定委員会での活発な議論のもとに素案が作成された制定プロセスは大変意義深いと認識しているが、結果的に「条例制定」がゴールとなってしまった。</p> <p>Q4. 策定委員会の雰囲気、議論の進み方は。住民意思が反映</p>

	<p>されたと考える部分は</p> <p>A. 委員の一人ひとりが思いの丈を発言していた。それを基に事務局がたたき台を作成し、さらに議論が交わされ素案が完成した。住民(委員)の意見が最大限反映された条例。</p> <p>Q5. 策定の取り組みでまちが変わったと感じられる部分は</p> <p>A. 特に変化はない。条例制定がゴールになってしまい、その後の取り組みも不十分になっている。</p> <p>Q6. 策定直後にコロナ蔓延が始まったが、条例推進にあたって不都合が生じたことは</p> <p>A. 「余市町民自治推進委員会」を书面開催せざるを得ないなどあり、普及取組みがますます停滞した。</p> <p>Q7. 策定後の課題と解消への取り組みは</p> <p>A. 行政の意思決定のスピード低下が懸念される。(事例は実際には発生していない)</p>
<p>6. 考察・感想</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・まず初めに、実際に足を運び、現場で生の声を聴かせていただくことの大切さを感じた。余市町総合政策部政策推進課の職員の方からは、現状の生々しいお話をお聞きすることができた。 ・何のために条例を制定するのか、余市市では条例制定が目的になってしまったことへの現在の状況をお聞きするに目的は重要であり、議論の際には議会側と行政側との目的の共有をすべきであると感じた。 ・改めて条例の中身の入れなくてはいけないこと、入れておくべきことの精査が必要であると感じた。 ・一度作ってしまっただけからでは、より良いものにしたかったと思っても、あるものを改善していくのか、新しく作るのか、というスタートに取り掛かるにもかなりのエネルギーがいるということであった。慎重に形にすべきである。 ・合計38回の会議をされ、委員の意思が最大限に反映されていると認識はされているが、委員の貢献には敬意を表したいが、結果 作った意味を感じられない印象を受けた。事務局が意見を言いづらくなるようなことがないよう、住民の中から委員を選ぶ際の選び方も難しさを感じた。 ・つくったらどうなるのか、どのような街にしていくなのか、方向性を明確にする必要があると感じた。

議員研修報告書

報告者 (会派等) 無会派 片野晶子

1. 研修期間	令和6年8月7日(水)
2. 研修場所	北海道札幌市図書館・情報館
3. 研修テーマ	図書館は社会変化状況に合わせた発展、変化を察知した対応が求められている。その中で札幌市図書館は、「札幌市民交流プラザ」内に情報環境の変化をとらえた「札幌図書館・情報館」を設置した。図書館の機能進化とともに、高山市の駅西に建設予定の複合施設に設置予定である図書館の分館の形なども併せ視察研修を行う
4. 研修項目	札幌市図書館・情報館の設置目的、機能、役割、効果について
5. 概要	※別紙資料参照 ○まちなかの複合交流施設「札幌市民交流プラザ」内に設置 ○ビジネスパーソンに寄り添う、まちの情報拠点(機能特化) ○本を貸さない図書館 ○誰もが落ち着ける空間づくり ○人に寄り添う本棚づくり ○リーチカウンターは、司書の「レファレンス」と「出張相談窓口」で専門家をつなぐ、ビジネス支援のゲートウェイ ○最新の情報は“人の頭の中”にある ○ダウンロードできない価値 ○エンペデッドライブラリーがつくる未来
6. 考察・感想	・「はたらくをらくにする」というコンセプトが明確でそれに基づいた運営がなされている。このコンセプトも行政側で打ち出されたものであり、もう一つの札幌市の図書館との差別化にもなっている。 ・貸出機能に重点を置いた既存の図書館とは異なり、調査相談、情報提供に特化し、課題解決型図書館ということで、利用者側の立場に立った運営が印象的であった。 ・立地は札幌市の中心市街地という立地を生かし、ビジネスや暮らしに関することを中心に書籍がならんでいるのも市民の視点に立った取り組みである。 ・コーナーにはテーマに関する本が飾るようにおいてあり、手にも取りやすい。本の配置にも工夫がなされていた。貸出をしない、という方針から「手に取りやすい」

というレイアウトはとても魅力的である。貸出をしない理由も、欲しい時に手に取れないということがないようにということで、一貫したポリシーが利用しやすさにもつながっていると感じた。

・館内には静かに音楽が流れており、子連れで図書館に来て調べものをしたり、仕事をする、そのようなシチュエーションを明確にして運営されているのも参考になった。図書館は私語を慎むべき、という概念もいい意味で壊された。コンセプトやターゲットを明確にした場合、これからの図書館づくりには必要な視点であるとも感じた。

・課題解決をゴールにしており、商工会議所との連携がなされ、ていることも学びになった。